

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・・



2020年
5月7日
第87号



ヒシハリソウ（ムラサキ科）

英名のコンフリーの方がお馴染みですね。第一圃場で今、淡紅紫色の釣鐘状をした形の花が垂れ下がっているのが見られます。ヨーロッパ原産で牧草として明治時代に渡来した多年草です。花に芳香があるので、今では主に鑑賞用として栽培されています。根茎と根をシムフィツム根またはコンソリダ根という名で、ヨーロッパで消炎や止瀉を目的とした民間薬として利用されてきました。日本では一時期、コンフリーの葉を天ぷらにすると美味、根拠のない「健康によい」として、よく食用とされていました。しかし、根だけでなく全草にアルカロイドを含み、実際に肝障害の症例が多発したことから、日本では2004年から食品としての製造販売が禁止されています。

また、葉の形状がジギタリスと似ていて、野生化したコンフリーの葉を収穫するときに、ジギタリスの葉と間違え、実際に摂取したための死亡例もあります。ジギタリスの葉はごく少量でも苦いので、区別し易いのはずですが。

シナアブラギリ（トウダイグサ科）

園内で2ヶ所、自然植物区の北側と、薬木区西側の山崎川沿いに植栽され、今、枝先に白い小花が見られます。広卵形の葉がキリ（キリ科）に似て、種子から油を採ることにより名づけられました。中国原産の雌雄同株の落葉高木で、近縁種のアブラギリよりも花も実も大きいのでオオアブラギリという別名もあります。冬にこの木の下を通ると、球形でミカンと同じくらいの大きさの暗褐色の実が沢山落ちてているのを見かけます。落ちた後、裂開したのを見ると3ヶの種子が確認できます。中国ではこの種子を油桐子（ユトウシ）として中医学で使用するようですが、実際の用途は、それから採れる桐油（きりゆ）の原料としてです。桐油は、かつてはアブラギリの種子から製造されていましたが、収量の違いから、現在はこちらからです。桐油は、猛烈な瀉下作用があるため食用にはせず、乾性油として燈火油、油紙、塗料、合成樹脂の原料として用いられます。

今、こんな草木が
楽しめます！！